

お化けやしき

清宮 聡子

二〇〇三年の三月、担任をしていた子どもたちが卒業した。振り返ると、年長児との一年は子どもたちの豊かな発想、イメージを実現しようとする思いに、今まで以上に圧倒されることが多かった。

妖怪図鑑

梅雨に入った六月の月曜日、保健室で、一冊の絵

本に頭を付き合わせて見入っているY夫とT夫がいた。何を読んでいるのかと思ひ、覗き込みに行つた。真剣な二人の手元には、『少年少女版 日本妖怪図鑑』岩井宏實（文）川端誠（絵）があつた。「ようかいずかん」というと、なんともおどろおどろしい響きなのが日本人が語り伝えてきた妖怪についての絵本である。時折、言葉を交わしながら絵

本を見るY夫とT夫を微笑ましく思いながら、私はその場を離れた。

しばらくして、クラスの前の廊下にY夫とT夫が絵本を床に開いて見ている姿が目に入った。二人は場を移し、絵本を見ていた。そしてその傍らにはクレヨンと紙があった。その様子から、「妖怪」を自分たちで描こうとしていることがわかった。私は、保育室の小さな机を廊下に出し、そこで描いてはどうかと、二人に声を掛けた。二人は「そうしよう」という感じで、机を運び出した。今度は二人に本の内容を聞きながら一緒にページを繰った。様々な種類の「妖怪」について、その呼び名の由来など、どんな行いをする妖怪なのかを書いてあった。主に絵を見ながら読み進めていた二人であったが、T夫が、「ほらほら」と言って、私に「海底(うなぎ)の怪」について書いてあるページをしめし、「先生こんなお化けが居るんだよ」と話し始めた。そし



て、「海難法師(かいなんほうし)」という妖怪についての文章を読んで欲しいと言った。読み終えると、T夫は「僕これ描こう」と言っていてクレヨンを手にした。T夫に呼応するかのようには、Y夫は、「僕、一つ目小僧を描こう」と言っていて、先程見ていた「一つ目小僧」を思い起こしながら、画用紙に向かった。

“お化けやしき” やろうよ

「妖怪」を描き始めた二人に気が付いた、D夫と、R夫が何をしているのかと見に来た。「妖怪図鑑」を目にした二人は気持ちが悪くなったのか、クレヨンを各々の引き出しから持って来た。私は四人には机が狭いと思い、保育室からもう一つ机を運んだ。早

速、D夫とR夫は本を見ながら、一番心引かれる「妖怪」を探し始めた。

四人は机を囲むようにして絵を描き始めた。「色んな妖怪がいるのねえ」と私もその絵本に感心しながら目をやった。描く手を止めたY夫が「ねえねえ、お化けやしき」やろうよ」と三人に投げかけた。D夫とR夫は、「いいね、いいね」と口々に答えた。T夫は「じゃあ、僕いっばい描こう」と答えた。突然の提案であった。しかし、それぞれの表情には、お化けやしき実現に向けての意欲が現れていた。

再びクレヨンを持つ手に力が入る四人であった。まずは、お化けをたくさん作ることが必要であると考えた子どもたちに、どのような声を掛けようかと思つた。机に向かう四人から、ふと視線をはずすと、少し離れたところからE夫とK夫が、こちらを見ていた。

「一緒にする？」と二人に声を掛けると恥ずかしそうに微笑みながら、頷いた。二人とも普段、絵を描いたりすることを好んでするような人たちではない。彼らが興味を示し、自分たちもやってみようと思つたことが嬉しく感じられた。クレヨンを持つたE夫とK夫が加わり「お化けやしき」の話が進み始めた。Y夫は描いたものをお面にしてみれば、お化けになろうと皆に言つた。描いたものを身に着けるというアイデアは採用され、この日は絵を描く作業を進めるところで一日を終えた。それぞれ描いたものは大切に引き出しにしまわれた。

コート室にて

「お化けやしき」をする上で、どの場をお化けやしきの空間にするのか、ということは子どもたちと共に考えなければならぬことだと思つた。

「雪女」を描きたいと言つて、M子も加わつた。メ

ンバーを増やしながらお化けやしきの「小道具」を作り続けるY夫やT夫たちに「お化けやしき」はどこですか?」と尋ねると、T夫が「コート室に決まってるよ」とあっさりと答えた。Y夫が「お兄さんたちがやってくれたでしょ、前に」と続けて理由を加えた。「コート室」とは、着てきたコートや、持ってきた鞆をかけたなり、置いたりするコート掛けや棚が壁際に並んでいる部屋である。出入り口は一箇所で、一時的に電気を消しても支障が無い部屋でもある。適度な広さのあるこの部屋は、確かにここ数年お化けやしきをする場として使われている。子どもたち同様に私も「コート室」をイメージしていた。このやり取りから「お化けやしき」というものが、子どもたちの中で、お兄さんやお姉さんたちがやってくれたこととして残っていることが伝わった。自分たちが体験したことが基盤になっているのだと改めて思った。

コース作り

いざ、コート室に場を移してということになった。お化けが隠れるために必要と考えて、衝立を保育室から持って移動した。Y夫とT夫がまず、出入り口付近に衝立を置いた。衝立を置いただけでは変化が出ないのではと思ひ、私は入ってきた人がどう進めばいいのかということを考えてはどうかと提案した。R夫は「積み木を使ったらいいんじゃない」と言いながら部屋を眺めた。

そのそばで、既に「雪女」に成りきっているM子が声を出しながら動き回った。そんなM子を見てR夫は「もう、M子やめてよ」と少し苛立った口調で訴えた。M子も負けずに、「いいじゃない、べつに」と言い返す。こうなるとお互い引けなくなってしまう。M子は、お化けやしきを構成していくということには気持ちが向いていない。お化けになって動く

ということが彼女のお化けやしきへのかかわり方なのだと思つた。それぞれのかわり方は尊重されるべきだが、まだ、お化けやしきの枠が形作られていないところでは、勝手な行動と受け取られてしまつても、仕方が無い。「コースを考えているから、一緒に考えましょう」と提案してみたものの、M子は「お化け作りの続きをするからいい」と言つて、保育室に戻つてしまつた。本当は二人が折り合いをつけて、一緒に出来ればと思ひながら、私は後を追えなかつた。まずは、お化けやしきの枠を少しでも目に見えるものになければと思つた。それが、後でM子をスムーズに迎え入れることに、繋がるのではないかと考えた。残つたR夫は再びコースを考え始めた。

Y夫とT夫は、小道具の準備に夢中になつてゐた。R夫に「まずは積み木を運んでみたら」と声を掛けた。Y夫やT夫には後で声を掛けることにし

て、二人で保育室から積み木を運んだ。それを並べ始めたR夫を見て、Y夫やT夫らも積み木をどう並べるかを考え始めた。しばらく色々々に並べてみたが、あまり複雑には出来ず、行く道と帰る道というようなシンプルなコースになつた。しかも、部屋の奥まで届かず短いものになつた。三人にとっては、それで充分なようであつた。

小道具いろいろ

前日はコース作りで終わった「お化けやしき」であるが、この日はお面の他に、色々な小道具が完成した。「火の玉」をT夫が、絵に描いた。私はそれが空中に浮かぶようになったら面白いのでは、と提案してみた。するとT夫は何かに吊るして動かせば良いと考えた。紙を細く丸めて棒状にした物に黒い糸で吊るすことにした。それを衝立の後ろに隠れて揺らすと、紙に描かれた「火の玉」が揺れた。その

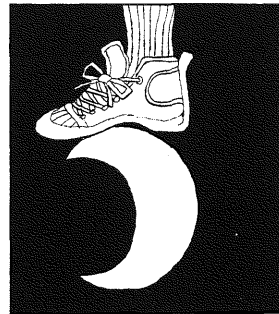
様子をY夫やK夫、R夫たちは嬉しそうにみた。この小道具に刺激を受けたのか、R夫は「傘お化けを作る」と言って保育室に戻った。R夫は、大きな模造紙に傘お化けを描いた。それを長さのある少し太い角材の棒につけて、衝立の後ろから操作できるようにした。

Y夫は自分も、衝立の後ろから操ることのできる道具を考えたいと私に言ってきた。紙のほかは何か使える材料はないかと考えた。揺れ動いて雰囲気の出るものとして、ずずらんテープを思いついた。Y夫にこういうものも使えるのではと渡した。長めに切ったものを束にして先を結び、更に一本を細く割くことでボリュームを出した。それを、竹の棒の先につけた。棒を手にして振ると、バサバサと音を立ててずずらんテープが踊った。衝立には黒い紙を張った。そこに、絵に描いたお化けを幾つか貼り付けた。小道具を考える過程はお互いのイメージを確

認し、また新しいことや考えを生むことに繋がったように思う。

スフィンクスお化けになるT実

お弁当を食べ終えて、午後も「お化けやしき」をしようと、Y夫、R夫、D夫、T夫らがコート室に集まった。そこに、T夫と親しいT実がやって来て一緒に「お化けやしきをやりたいと話しかけてきた。コート室で「お化けやしきをやるう」として」ということはクラスの人たちにも浸透していた。T実



はどんなことが始まるのかという期待感に満ちた表情で、Y夫やT夫らに、「T実ちゃんはどうなのお化けになればいい」と聞いた。Y夫が「T実ちゃん、スフィックスのお化けになってよ」と答えた。「なぜスフィックスが登場するのだろう」私は意表をつかれ、思わず「どうしてスフィックスなの？」とY夫にたずねた。「えつ、ピラミッドにいるんだよ」と答えが返ってきた。徐々に様々なイメージが交錯し始めているのだと思い、それ以上問うのは止めた。Y夫はT実に「僕が手をたいたら立ち上がるんだよ」と提案する。T夫は、白い紙を二枚細長く切ったものを手にコート室に戻ってきた。そしてその紙をT実の両耳の横につけた。T実の顔つきが徐々に変わっていった。動きまで指示をされてすっかりなりきり始めたのか、妙に無表情な「スフィックスお化け」になっていった。Y夫とT夫、R夫たちは、今度は自分たちがどんなお化けになるかを考

えて動き始めた。こうして、新たなメンバーを加えてながら午後の時間は過ぎていった。

月曜日から始まったこの活動も気が付けば木曜日を終えようとしていた。その持続力に驚ろかされる毎日だった。同時に、子どもたちと一緒に少しずつアイデアを出し合い、形にしていけることがとても楽しく感じられた。

動き始めたお化けやしき

金曜日。朝から準備が始まった。作った物を運ぶ。いつの間にか衝立が他のクラスからも借りられていて、数が増えていた。効果音として他のクラスの先生からお借りし、録音した「お化けのおんがく」のテープを子どもたちにも聴いてもらった。なんとも言えないおどろおどろしい雰囲気を出すこの音楽は、この幼稚園の「お化けやしき」に使い続けられてきたものである。この音楽のおかげで、一瞬の

うちに薄暗い空間が「不気味な」空間に変化するほどの威力を持っている。

思い思いのお化けになった、Y夫、R夫、K夫にT夫、T実やM子たちも準備を整えた。音楽をかけ、お客さんを待つ。いつ始まるのかと期待してくれている年長児のH子や、隣のクラスのエ子たちが何人かを連れ立ってやって来た。恐る恐る入る人たちを思い切りよく驚かすお化けたち、たちまちコート室に「キヤー」と言う声が響いた。声を上げながら飛び出すお客さんたち、年中児も騒ぎを聞きつけてやってきた。私は出入り口に立ち、入る人と出てきた人に対応することにした。しばらくすると、その役割が必要だと感じたのか、Y夫はお化けになるのをやめた。そして、案内役をし始めた。お化けになりながらも、全体の様子に目を向けているY夫らしい選択だった。動き始めた「お化けやしき」はお化けになる側と驚かされる側の存在が明らかになる

ことで、より生き生きとし始めた。

支えられ、広がり、伝えられる

週が変わったの月曜日、先週の金曜日に動き出した「お化けやしき」にお客だったH子が「雪女」として参加することになった。白いナイロンの布を見せると、最初少し戸惑っている様子であったH子の表情が明るくなり、「私やる！」と元気に言った。白い布が「雪女」のイメージに繋がったのだろう。その様子を見て、最近H子とよく遊んでいるK子も「やりたい」と言って来た。M子を含め三人の「雪女」が誕生した。R夫らも、自分たちとは趣の違うお化けが増えていくことが嬉しい様子であった。コート室は廊下を挟んで、年少児の保育室の向かいに位置している。小さい人たちへの影響が気になってきたが、担任の先生方は、さりげなく、この活動を支えて下さった。年少さんは、年長の子ども

たちからするとかっこうのお客さんとなる。「お客さん」の存在は活動が盛り上がるためには欠かせない要素でもある。「宣伝に行こう」という時は、必ず年少児のクラスへ出向くのである。そこで、担任

の先生方が子どもたちと一緒に応じてくれることで、情報がしっかりと伝わる。これは、年少児に限ったことではない。また、担任以外の保育者も子どもたちが活動をより広げ、深めていくことが出来るように様子を見ながら関わる。例えば、お化けの動きが過ぎないように声を掛けて下さったり、入り口を覆う布を取り付けて下さったり、もちろんお客さんとしても子どもたちと一緒に楽しんで下さる。様々な人が関わることで、子どもたちの動きや活動そのものも、洗練されてくるのだと改めて感じた。

この事は、特に今回の活動に限ったことではないのだが、毎日少しずつ作り上げていく流れになった

「お化けやしき」においては、とても重要なことであつたと考えられる。

繰り返し返されるお化けやしき

少しずつ形になった「お化けやしき」はその後、子どもたちの気持ちが向くと繰り返し返された。年中組の人が混ざったり、年少組の人が始めたりもした。子どもたちは「お化けやしき」を、やり伝える“のである”か。「お化けやしき」の文化のようなものが、そこにあるような気がする。

衝立の陰に身を潜め、息を潜める。お化け同士で無言の合図を交わす、その瞬間の何とも言えない緊張感を私は忘れることが出来ない。子どもたちにとって、そんな感覚が残っているのだろうか、「妖怪図鑑」を手につと、思った。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)